OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	集団形成過程が内集団バイアスに及ぼす影響
Author(s)	正高, 杜夫; 釘原, 直樹
Citation	対人社会心理学研究. 2015, 15, p. 95-99
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54435
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

集団形成過程が内集団バイアスに及ぼす影響

正高杜夫(大阪大学人間科学研究科)
釘原直樹(大阪大学人間科学研究科)

本研究は、集団形成の過程の違いが、内集団バイアスに与える効果について吟味する。具体的には、実験室において形成された最小条件集団から、同様の手続きを用いてさらに集団を分割する事により、集団の形成過程を再現した。実験の結果、内集団バイアスにおける否定的認知傾向(外集団蔑視)が集団形成の過程で生起することは示されなかった。一方、集団形成の過程において、内集団への好意的行動傾向(内集団ひいき)が変化することが明らかになった。以上の結果より、集団間の境界の明確さが内集団ひいき行動に影響を与えることが示唆された。

キーワード:外集団蔑視、集団協力ヒューリスティック仮説、集団間葛藤、内集団バイアス、集団形成過程

問題及び目的

人類の歴史は対立・抗争の歴史である(大渕, 1993)。そして今なお紛争は止むことを知らない。昨今では、在日韓国・朝鮮人に対してのヘイトスピーチに関する事件、イスラム過激派集団と国家間の闘争が、新たな対立・抗争の例としてあげられる(Wall Street Journal, 2014 ; BBC News Asia, 2013)。社会心理学において、集団間の攻撃行動は集団間葛藤という言葉で形容される。集団間で相互に否定的認知や感情を抱き、相互攻撃を行う状態が、その定義とされる(縄田, 2013)。本研究は、人の普遍的な認知・行動の偏向である内集団バイアスが、集団間葛藤をもたらす状況を新たな手法を用いて検討した。

内集団ひいきの説明原理

内集団バイアス(Tajfel, Billig, Bundy, & Flament, 1971)は集団間葛藤の発生を促進する要因として多くの研究に取り上げられてきた(Mullen, Brown & Smith, 1992)。内集団バイアスは自らが所属する集団(内集団)に対して、好意的な評価・行動を生起させる一方、自らが所属しない集団(外集団)には否定的な評価・行動を生起させる傾向と定義される(横田・結城, 2009)。内集団バイアスを検討した実験の多くでは、参加者が内集団の1人と、外集団の1人に実験参加報酬を分配する課題(報酬分配課題)が行われた。その結果、限りなく実体性の低い集団(最小条件集団)間でさえ、外集団成員に対してより少なく、内集団成員に対してはより多く報酬を分配する傾向が繰り返し確認されている(山岸, 2009)。

Tajflel & Turner(1979)は、内集団バイアスの説明原理として、社会的アイデンティティ理論を提唱した。社会的アイデンティティ理論に基づけば、人は集団に所属した際には、集団成員としての意識(社会的アイデンティティ)を保持すると考えられる。そして、社会的アイデンティティは個人の自尊感情と関連しており、人は内集団を外集団よりも相対的に高めることにより、自尊感情の維持・高揚を行うと考えられた(Turner, Brown & Tajfel, 1979)。つまり、社会的アイデンティティ理論において、内集団バイアスは内集団の優位性を保つために、生起すると説明される。よって、人は内集団としてのカテゴリーに内包されるだけで、外集団に対して否定的な評価・行動を生起させると考えられてきた。

しかしながら、これらの内集団バイアス研究には問題があった。報酬分配課題では、内集団に対しての好意的な評価・行動傾向(内集団ひいき)と外集団に対する否定的な評価・行動傾向(外集団蔑視)が区別されていなかったのである(Brewer, 1999; 亀田・村田, 2010)。

近年、内集団ひいきの説明原理として集団協力ヒューリスティック仮説という新たな説明原理が提案されている(神・山岸, 1997)。集団協力ヒューリスティック仮説は、内集団ひいきが発生する原因を内集団内の互恵的な交換関係への期待にあるとした。つまり人は内集団に対して、協力的な行動を生起させれば、その行動に対しての返報が、他の内集団成員から得られると期待するのである。そのため、積極的に内集団へ好意的な評価・行動を生起させるとした。この説明原理において、内集団バイアスは集団の相対的優位を保つために発生するのではないと主張される。この集団協力ヒューリスティック仮説を提唱した実験においては、内集団バイアスに外集団蔑視は含まれないことが明らかになった (山岸, 2009)。つまり、人は内集団としてのカテゴリーに含まれるだけでは、外集団を蔑視しないのである。

最小条件集団の問題点

しかし、上述した内集団バイアスを検討した一連の実験方法には問題がある。内集団バイアスは、主に最小条件集団パラダイム(Tajfel et al, 1971)を用いて検討されてきた。最小条件集団パラダイムとは、参加者を絵画の好み(Tajfel et al, 1971)やコインの表裏(Billig & Tajfel, 1973)など些細な基準で、2 分割し集団を形成する方法

である。つまり最小条件集団は、参加者にとって実体性の低いカテゴリーから形成された集団と言える。しかしながら、現実の社会的な集団には、その集団が形成されるまでに、より濃密な背景が存在すると考えられる。入谷(1969)によると社会集団は外的体制(外的環境により規定)の下に成立していた集団から内的体制(人間の自発的な行動)に基づいた集団が派生し、その集団が分離すると再び外的体制に基づく集団と化し、またその下に内的体制を生むという循環過程がみられると主張している。入谷の主張によれば、社会的な集団は真空状態から発生するのではなく、基となる集団から派生すると考えられる。最小条件集団は、社会の集団形成過程を反映した実験パラダイムであるとは考え難い。そこで本研究ではまず初めに最小条件集団を形成した後、更にそこから集団を分離・派生させるべく実験手続きをとる。具体的には、はじめに絵画選好課題により最小条件集団を形成する。その後、報酬分配課題を行い集団内に交換関係を生起させ、集団実体性を高める。加えて、絵画選好課題を行い、交換関係を持つ集団から集団が派生するという、社会集団の形成過程を反映した実験パラダイムを使用する。

集団の派生に伴う認識の変化

集団協力ヒューリスティック仮説によれば、人は内集団内には互恵的な交換関係が存在すると認識する。しかし、新たな集団がある集団から分離・派生する際、内集団の成員として協力を期待されていた対象(内集団成員の一部)は、協力を期待できない外集団成員へと変化する。その際、集団間認知にはゲインロス効果が伴い、外集団蔑視が生起すると考えられる。

ゲインロス効果(Aronson & Linder, 1965)とは、対人印象の変化が、対象に対する好意度に影響を与える現象である。ゲインロス効果においては、自分にとって価値のあるポジティブな他者が、価値のないネガティブな他者へと変化した場合には、一貫してネガティブな他者よりも、好意度が低くなると考えられる。本実験は、内集団成員という互恵的な集団の一部が、外集団という非互恵的な集団へと変化するという、現実に即した集団形成過程を再現する。内集団から分離・派生した外集団は、一貫した外集団よりネガティブな印象を内集団に与えると考えられる。以下が本研究の仮説である。

仮説: 内集団から分離・派生した外集団は、一貫した外集団と比べて否定的な認知対象となる。即ち、当初からの外集団に対してよりも、内集団からの分離・派生した外集団に対しての方が、内集団の成員から報酬は少なく分配され、課題遂行もまた、より否定的に評価される。

方法

実験参加者

大阪大学学生36名(男性8名、 女性28名: 年齢 M = 19.97, SD = 3.02)

実験計画

集団の種類(統制、内内集団、内外集団、外内集団、外外集団)の 1 要因 5 水準参加者内計画であった。

実験の手続き

実験は 3~4 名 1 組で行われた。実験参加者には隣室にも 4~5 名の参加者が待機しており、全 8 名で実験を行っているという虚偽の説明を実験開始時に行った。また全ての実験参加者は、衝立で仕切られた個別のスペースに案内され、相互に会話しないよう求められた。本実験手続きは 2 つのフェーズに分かれている。第 1 フェーズにおいて実験参加者は初めにグループ分けの課題として、第 1 次絵画選好課題を行った。絵画選好課題にはワシリー・カンディンスキー(Wassily Kandinsky)とパウル・クレー(Paul Klee)の作品を用いた。参加者は 7 ページにわたってそれぞれ 2 枚の絵画が印刷された小冊子が渡された。そして全 7 ペアの絵画の一方“より好ましい作品”に丸をつけるよう求められた。回答後、実験者はそれら冊子を回収し、結果を集計する旨を告げ実験室から約 3 分間離れた。

集計終了後、実験参加者には所属するグループを記載したプリントを配布した。そして、カンディンスキーとクレーのどちらを選好したかを基準として集団に振り分けられた旨を説明した。 ただし、実際には絵画の好みを基準にグループ分けはなされておらず、参加者は全員クレーを選好した集団のメンバーとなっている。またこの時点で、8 名の実験参加者は 4 名 2 集団に分離しているとの教示を受けた。

次に、心理学で一般的に用いられる意思決定の課題と称して、報酬分配課題を行った。報酬分配課題とは、元手となる実験参加報酬の 500 円(100 円玉 4 枚、10 円玉 9 枚、1 円玉 10 枚から成る)を内集団成員と、外集団成員のそれぞれに 1 名ずつに分け与える課題である。その際、全ての実験参加者は報酬分配課題に参加すると教示された。 参加者自身の報酬は自分以外の内集団成員と外集団成員、それぞれ 1 名ずつから与えられた金額によって決定されるとの説明が行われた。本研究では 500 円のうち、内集団成員に対して分配した金額を内集団ひいきの指標として検討した。

続いて、実験参加者に作文の採点課題(Gerard & Hoyt, 1974 ; 杉浦・坂田・清水, 印刷中)を行うように求めた。過去の実験参加者が執筆した作文と偽り、計 3 枚の作文が呈示された。その際、執筆者の知性や作文に対する好悪、そして全般的な印象(自由採点)について 100

点満点で採点するように求めた。その際、執筆者の所属グループ情報が作文に付加されていた。執筆者の情報が、本実験課題の独立変数となっている(内集団執筆者条件・外集団執筆者条件・執筆者不明条件)。なお執筆者不明条件は、本研究における統制条件である。作文の内容は、環境問題と、社会的マナーに関係したものであり、あらかじめ実験者が新聞のコラムから抜き出すことにより作成している。作文の点数が高くなればその集団・成員に対して好意的認識が、低下すれば否定的認識が生起していると考えられる。 作文採点課題は、報酬分配課題で検討できない内集団ひいきと外集団蔑視という、2つの異なる方向性を持つ認知を区別することができる。

第2フェーズでは、同様の小冊子を用いて絵画選好課題を行い、第1フェーズで2分割した集団をさらに2分割し、集団の分離・派生過程を再現した。絵画選好課題の絵画には、フランツ・マルク(Franz Marc) とロベール・ドローネー(Robert Drauney)の作品を用いた。この操作によって、実験室に2名ずつの4集団が形成されることとなった(実際には実験参加者は全て同集団に割り振られることとなった)。Figure 1 に集団の分割プロセスを示す。

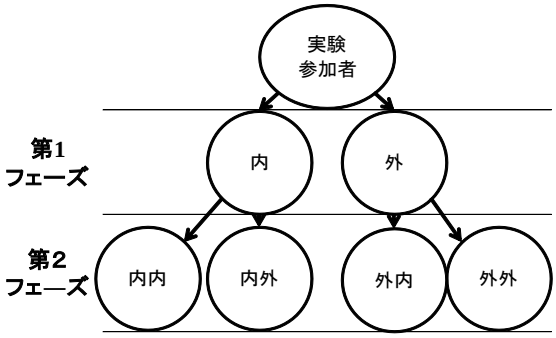


Figure 1 本実験の集団形成過程

内内集団 第1次絵画選好でクレー、第2次でマルクを選好した集団。本実験参加者が所属する集団。

内外集団 第1次絵画選好でクレー、第2次でドローネーを選好した集団。第1フェーズで同集団として、交換関係の期待が発生した外集団。

外内集団 第1次絵画選好でカンディンスキー、第2次でマルクを選好した集団。

外外集団 第1次絵画選好でカンディンスキー、第2次でドローネーを選好した集団。

第2フェーズでは、第1フェーズと同様に、第2次の報酬分配課題(内集団成員 vs Figure 1 の3種類の外集団成員)を3回行い、第2次の作文採点課題を計5回(内内集団執筆者条件・内外集団執筆者条件・外内集団執筆者条件・外外集団執筆者条件・執筆者不明条件)行うよう実験参加者に求めた。最後に質問紙に回答するように求め、実験を終了した。質問紙で、参加者は内集団成員としての意識の程度を、"1,全く意識しなかった—7, 非常に意識した"の 7 件法で評定するよう求められた。内集団成員としての意識は、内集団ひいき量と正の相関をもつと明らかになっており(久保田・吉田, 1995)、本実験結果の分析に用いている。

結果

まず初めに、第1フェーズにおける報酬分配金額について、内集団バイアスの生起を検討するために、報酬の平等分配を意味する250円を基準値として1サンプルの t 検定を行った。結果、有意差が認められた(t (35) = 2.69, p < .05; Table 1)。

すなわち、第1フェーズで、報酬分配に関しては内集団ひいきが生起したと明らかになった。次に、第1フェーズにおいて行われた作文採点課題の平均値について内集団ひいき、外集団蔑視の生起を検討するべく1要因分散分析を行ったが、有意差が認められなかった(F (2,70) = .86, *ns*)。

次に、第2フェーズにおいて行われた報酬分配課題について、内集団成員としての意識の程度を中央値(Me = 5.00)を基準として高・低群に分割し、集団の種類と成員意識を独立変数、金額を従属変数とした2要因分散分析を行った(Figure 2)。結果、成員意識の主効果が有意(F(1,34) = 6.03, p < .05)であり、成員意識と集団の種類の交互作用が有意であった(F(2,68) = 3.99, p < .05)。単純主効果の検定では、成員意識高群において集団の違いに有意な差が認められた(F(2,52) = 5.53, p < .01)。さらに成員意識高群で多重比較を行ったところ、内外集団と外外集団間に有意差(p < .01)が、また内外集団と外内集団間に有意傾向(p < .10)が示された。一方で、作文得点も同様に分散分析を行ったが、有意差は認められなかった(F(4,140) = .33, *ns*)。

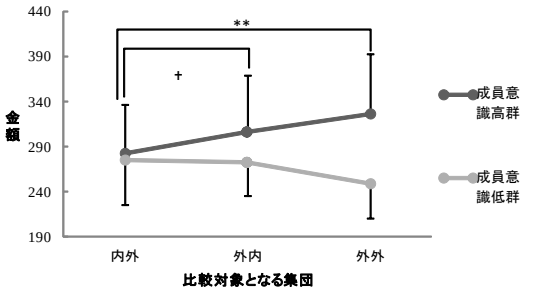
Table 1 第1・第2フェーズにおける
内集団に対する報酬分配金額

第1フェーズ	第2フェーズ		
対外集団	**対内外集団**	**対外内集団**	**対外外集団**
274.36	281.25	298.19	307.67
(54.28)	(51.57)	(58.50)	(68.88)

注()内は標準偏差

考察

本研究は、集団形成過程が集団間認知に与える影響を検討するために実験を行った。集団形成の過程を通じて外集団に対する否定的認知が生起すると仮定したが、



注 エラーバーは標準偏差

Figure 2 第 2 フェーズの内集団に対する報酬分配金額

仮説を支持する結果は得られなかった。

第 1 フェーズにおいては、内集団に対しての報酬分配金額が平等分配を意味する 250 円より有意に多いことが示され、内集団ひいきが発生していたと言える。従来の研究と同様に、最小条件集団間では内集団ひいきが生起していたと考えられる。一方で、作文採点課題においては有意差が認められなかった。過去の実験参加者が執筆した作文であるとの教示が、実験操作のインパクトを弱めた可能性がある。加えて、作文に対する実験参加者個々人の好き・嫌いが採点に大きく影響したために、実験操作が効かなかったことも考えられる。

第 2 フェーズにおいては、内内集団が内外集団に否定的な認知を発生させるとの仮説を設定していたが、第 1 フェーズと同様に集団間の差が検出できなかった。一方、それぞれの集団間で、内集団ひいきの程度に差がみられた。集団への意識の程度と集団の種類による分析では、内外と外内、また内外と外外集団の間に有意傾向や有意差が示されている。内外集団と外外集団間の差は、内集団とのカテゴリーの類似度と、報酬分配課題による交換関係の経験が内集団へのひいきを低下させることを示すものであった。カテゴリーの類似度が内集団ひいき量を低減させることを示した先行研究はこれまでにも行われている(Brown & Turner, 1979; Vanbaselaere, 1987)。本研究の結果からも、集団カテゴリーの類似度が内集団ひいきに影響を及ぼすことが示唆されている。

また、内集団のメンバーとしての意識が強かった成員意識高群の実験参加者は、外内集団よりも内外集団へと報酬を多く分配する事が明らかとなった。つまり、過去の同一集団として報酬分配課題を行い、交換関係を経験したことが、内集団ひいき量を低下させたと考えられる。本研究では交換関係の期待に応えない対象へと変化した内外集団は、否定的認知の対象とされ、報酬が少なく分配されるとの仮説をたてた。しかしながら、内集団から派生した外集団は、一貫した外集団よりも多く報酬を分配されたことから、否定的認知の対象とはならなかったと言える。すなわち、ここではゲインロス効果は検出されなかったと考えられる。

総括として、本研究は内集団と外集団の明瞭な区別が、内集団ひいきを生起させることを示した。同じ集団としての交換関係の経験と集団カテゴリーの類似度が、両者ともに、内集団と外集団の境界の明瞭さを低下させる要因であると推察される。集団間の境界を低減させる要因は、集団形成過程や様々な社会場面において発生する。今後とも、これら集団のカテゴリー性により着目した研究が望まれる。

本研究点の問題点と今後の課題

本研究では、内集団ひいきの指標として報酬分配課題を用いた。この課題においては、統制条件が設けられていないため、内集団ひいきが各集団間で変化したことは統計的に示唆されたが、増加もしくは減少したのかが明確でない。加えて、内集団バイアスにおける、内集団ひいきと外集団蔑視のそれぞれが、区別されていない。今後、ゼロサム資源の分配のような指標ではなく、統制条件を設けることが可能な手法で、内集団バイアスを検討する必要がある。

引用文献

Aronson, E., & Linder, D. (1965). Gain and loss of esteem as determinants of interpersonal attractiveness. *Journal of Experimental Psychology*, **1**, 156-171.

BBC News Asia (2013). Japan court in Korean discrimination ruling BBC 2013 年 10 月 7 日 <http://www.bbc.com/news/world-asia-24427921> (2015 年 1 月 8 日)

Brewer, M. B. (1999). The psychology of prejudice: Ingroup love or outgroup hate? *Journal of Social Issues*, **55**, 429-444.

Billig, M., & Tajfel, H. (1973). Social categorization and similarity in intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, **3**, 27-52.

Brown, R. J., & Turner, J. C. (1979). The criss-cross categorization effect in intergroup discrimination. *British Journal of Social Psychology*, **18,** 371-382.

Gerard, H. B., & Hoyt, M. F. (1974). Distinctiveness of social categorization and attitude toward ingroup members. *Journal of Personality and Social Psychology*, **29**, 836-842.

入谷敏男 (1969). 新社会心理学 東海大学出版会

神 信人・山岸俊男 (1997). 社会的ジレンマにおける集団協力ヒューリスティックの効果 社会心理学研究, **12,** 190-198.

亀田達也・村田光二 (2010). 複雑さに挑む社会心理学 ―適応エージェントとしての人間― 改訂版 有斐閣アルマ

久保田健市・吉田富二雄 (1995). 少数派および多数派集団の集団間差別と態度の類似性 ―最小条件集団パラダイムを用いて― 社会心理学研究, **11**, 116-124.

Mullen, B., Brown, R., & Smith, C. (1992). Ingroup bias as a function of salience, relevance, and status: An

integration. *European Journal of Social Psychology*, **22**, 103-122.
縄田健悟 (2013). 集団間紛争の発生と激化に関する社会心理学的研究の概要と展望 実験社会心理学研究, **53**, 52-74.
大渕憲一 (1993). 人を傷つける心―攻撃性の社会心理学― サイエンス社
杉浦仁美・坂田桐子・清水裕士 (印刷中). 集団間と集団内の地位が内・外集団の評価に及ぼす影響―集団間関係の調整効果に着目して― 実験社会心理学研究
Tajfel, H., Billig, M. G., Bundy, R. P., & Flament, C. (1971). Social categorization and intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*, **1**, 149-178.
Tajfel, H., & Turner, J.C. (1979). An integrative theory. In W.G. Austin & S. Worchel (Eds.), *Individual self, relational self, collective self.* Philadelphia: Psychological Press. pp. 77-98.
Turner, J. C., Brown, R. J., & Tajfel, H. (1979). Social comparison and group interest in ingroup favouritism. *European Journal of Social Psychology*, **9**, 187-204.
Vanbeselaere, N. (1987). The effects of dichotomous and crossed social categorizations upon intergroup discrimination. *European Journal of Social Psychology*, **17,** 143-156.
Wall Street Journal (2014). フランス、イスラム国に初の空爆―イラク北東部で補給所を破壊― Wall Street Journal 日本版 2014 年 9 月 20 日 <http://jp.wsj.com/articles/SB10656493786288173419804580164983143840418 > (2015 年 1 月 8 日)
山岸俊男 (2009). 集団間協力と集団間攻撃―最小条件集団の意味するもの― レヴァイアサン, **44**, 22-46.
横田普大・結城雅樹 (2009). 外集団脅威と集団内相互依存性―内集団ひいきの生起過程の多重性― 心理学研究, **80**, 1-9.

The influence of group formation processes on ingroup bias

Morio MASATAKA (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)
Naoki KUGIHARA (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

The purpose of this study was to investigate the influence of differences in group formation processes on ingroup bias. An experiment was conducted in such a way as to better reflect a social occasion rather than the conventional minimal group paradigm. Specifically, social group formation processes were duplicated by dividing minimal groups into two groups. It was hypothesized that outgroup derogation would occur through group formation processes. However, the hypothesis was not supported by the obtained results. On the other hand, fluctuations in ingroup favoritism through group formation processes were observed. Overall, the results suggested that a boundary between the ingroup and outgroup influences ingroup bias.

Keywords: outgroup derogation, group heuristic, intergroup conflict, ingroup bias, group formation processes.